
哲学でいこう！

源雪風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

哲学でいこう！

【コード】

N9357N

【作者名】

源雪風

【あらすじ】

情けない哲学教授と、弟子と学生が繰り広げる日常系のお話。

(前書き)

以前投稿したものを読みやすく並べました。

一章 おかしな隣人

「真理、うおっ真理だ真理あははは。」

隣の部屋からの奇声にぶち切れた俺は、壁を思いつきり蹴飛ばした。この春から大学生になり、一番安い下宿先に来た一日目の夜のことだった。

これじゃ先が思いやられる。

やれやれと首を横に振っていると、大家のおばさんが訪ねてきた。まさかこの奇声を俺が出してるとでも思ったのか。

おばさんは俺の目を真っすぐ見て言った。

「ねえ、ちよつと隣の部屋の様子を見てきてくれない？」

奇声のする部屋は、俺の部屋と大家さんの部屋に挟まれている。

大家さんもいらついているらしく、目がキラキラしている。

奇人の巣窟なんて足を踏み入れたくないが、大家さんをこれ以上怒らせたら俺も追い出されるかもしれない。

俺はしぶしぶ行くことにした。

呼び鈴を押しても返事がない。

大家さんは歯ぎしりしながら

「大家の私が許可する。これを使って入りな。」

と、合鍵を渡してきた。

大家の権力恐るべし。

鍵を使おうとドアノブに手を掛けたところ、すんなり開いた。鍵くらいかけとけよ。

部屋の中は真っ暗だ。

中からやむことのない奇声が続く。

ここはお化け屋敷か。

照明をつける。

光に包まれた部屋には、本で埋め尽くされた床があり、男がいた。男はボサボサの黒髪に、黒ゴマみたいな情けないひげ、骨と皮だけの体、目は瞳孔が開いている。

服装はランニングと値札が付きっぱなしのトランクスだ。

残念な男は、よれよれのノートに高速で字を書きとめている。

汚い字なので全く読めない。

「そつだ！他者と自分が存在を認め合うことで世界は作られていくのか！」

それなら自分の部屋に侵入してきた他者に早く気付けよ。

勝手に部屋の明かりがついたことを怪しめよ！

まさか、明りがついたことにすら気付いてないのか。

うるさいけど大物だ。

「はっ、君！ちょうどいい所に来た。私の話を聞きなさい。」

やっと気付いたのか。

でも、めんどくさいことが起こりそつだ。

わっ、嬉しそうな顔でこっち見るな。

断りにくいだろうが！

でも、俺は断る。

「いや、結構です。それより、叫び声が迷惑なので静かにお願いします。」

よし、きつぱり言ってやった。

さて帰るかな。

全身から悲しいオーラを出して、しょんぼりしている男なんて見えないぞ。

うん、全く見えない。

奇声はぱったり止み、すっかりあの男を忘れていたある日、また遭遇してしまった。

大学で哲学の体験講義を選択したら、案の定教授がヤツだった。

さすがに仕事なので、髭も綺麗に剃ってあるし、スーツだ。これから遊園地に連れて行ってもらえる子供みたいに目を輝かせてやがる。

「みなさんこんにちは。私は哲学教授の月原だ。私は徹夜で楽しくて仕方がない。さあさあ話そうじやないか、この世界の不思議について。」

学生たちがざわめいてるぞ。

大丈夫かこの人。

「さて、今回は人間の世界の生まれ方だ。」

講義を一番前の席で聞いているやつが、どうも大学生とは思えない。

浪人生か？

「おつと言い忘れた。こちら助手で弟子の青木。」

青木はぺこりとお辞儀した。

犬みたいな人だ。

弟子向きかもしれない。

しばらく講義を聞いていたが、難しすぎて眠ってしまった。

目を覚ました時には教授が結論を言うところだった。

「人間の世界は、神によつて与えられた所に人々が生きているのではなく、人々の認識が重なり合つて出来ている。」

よし、また寝ようと目をつぶった時、一人の学生が無謀にも質問するのが聞こえた。

「では、相反する認識AとBが存在した場合、重なり合いませんよね。どうなるんですか。」

「その場合、一つの円の中にAの円とBの円が存在する形になる。」

「AとBを一つの大きな円で囲んで、一つの認識と見なすわけですね。」

「例としては、はいといいえ二通りの答えがあったら、その二つを返事というグループでまとめる。」

さすが哲学の教授。

俺のスローな頭じゃ話についていけない。

「では、続いて質問させてください。認識されなければ存在しないのと同じということですか。」

「全く同じとは言わない。場合による。例えば、人間が見つけない動物がいるとして、人の認識として存在しているかと問われると、知らないのだから存在していない。しかし、地球上に物体として存在している。人から見ると存在せず、地球から見ると存在しているということだ。人と地球、どちらを主体とするかにより変わる。」

頭が痛くなってきた。

この講義は受けたくない。

しかし、講義の最後のこの一言で気持ちが変わった。

「この講義は、出席を取らない。面倒だからな。つまり、サボっても成績に響かない。では何が成績を決めるかと言うと、学期末に提出してもらったレポートだけだ。自分で決めたテーマについて哲学的な論文を書いて提出してくれ。」

屁理屈言うのは得意だから、レポートだけなら自信がある。

話を聞くのが嫌なら、サボればいい。よし決めた。哲学を受けるか。

二章 教授の不運

哲学の講義を終え、私は食堂で昼飯を食べるべく待っていた。

そろそろ青木君が、お湯を淹れたカップラーメンを持ってきてくれる。

噂をすれば来た来た。

「師匠、今日はシーフードヌードルですよ。」

「おおそうか。御苦労。」

青木君は私の向いの席に座った。

「もう食べごろですよ。いただきませしょう。」

カップラーメンのふたをペリペリ剥がして、割り箸を麺に突っ込む。さあ喰おうかと思ったその時だった。

「あつ、哲学の月原教授ですよ。さつきはどうも。」
先ほどの講義で質問してきた学生がやってきた。

一言で立ち去るかと思いきや、面倒くさいんだこいつ。

「質問したいことが山ほどあるので聞いてください！」

正直、面倒くさいから断りたい。

しかし将来有望な哲学者の芽を育てるのも大切だ。

こいつは面倒だけど哲学者向きと見た。

いや、むしろ面倒なヤツは哲学者向きかもしれない。

「分かった。ラーメンを食べながら聞かせてもらうとするよ。」

よし、これで話を熱心に聞いてラーメンのびちゃってイヤンは回避した。

ふと青木君を見ると、自分のカップラーメンの夢中になっていた。

青木君はラーメンのこととなると何も見えなくなる。

それでこそ我が弟子だ。

その後、学生の話聞きながらラーメンを食べたが、話がなかなかおもしろく、ラーメンの味に集中出来なかった。

三章 創世の使者

八幡君子はうろたえた。

人生を左右する取り返しのつかないことをしてしまった。

哲学のレポートと間違えて、自作の妄想小説を提出してしまった。

しかも内容が、教授と弟子の青木がいちゃいちゃラブラブして、愛の真理を見つけるといふもの。

提出したとはいえ、気付くのが早かったから、今から教授の研究室へ言って取り換えれば、読まれずに済むかもしれない。

君子は研究室へと走った。

息を切らして研究室のドアをノックすると

「おっ、誰か来た。どうぞ。」

と、ゆるい声でした。

君子は部屋に飛び込むな事情を話す。

教授と青木は、身動きせずに話を聞いていた。

もうだめだ。こんなことがばれたら単位がもらえない。

君子は全てを話しきると、すぐるような思いで教授らを見て言葉を待つ。

「ああ、あれか。楽しく読ませてもらったよ。娯楽小説の形式をとりながらも、私の講義の内容が細かく論じられていて、論文ではないが内容としては申し分ない。だからそんなにおろおろする必要はない。」

普段はしょぼくて頼りない教授が、この時は救世主に見えた。

「ということは、単位は大丈夫ですか？」

「こちらが指定した論文形式を満たしていないから満点とはいかないが、内容を考慮して単位をあげよう。」

今まで心の中でいっぱい悪口を言っつてすみませんでした。

これからは夏子ちゃんのやっつるファンクラブに入って敬います！

「ありがとうございます。」

「いや、君のお陰で新しい哲学のテーマが思いついたよ。ズバリ、人はなぜ愛し合うのか。」

はっ、まずい！

この流れは教授が長話を始める前触れだ！

「まず愛について考えた。私は愛には二つあると思う。精神的な愛と肉体的な愛。しかしこのように二つに分けるには、精神と肉体は同じものか、別々なものかという問題があり……。」

出た！教授お得意の話がどんどん脇道に逸れて長い攻撃！

やっぱりファンクラブに入るのやめる。

話の長いおっさんは却下。

話なんか聞かずに立ち去りたいけど、怒らせると単位を取り消されるかもしれない。

君子はまたスがるような目で青木さんを見た。

青木さんは空気を読んで師匠に一言言ってくれた。

「師匠、その話はノートにしっかりと取りまとめ整理してから、後日講義で話したらどうでしょうか。ほら師匠、ちょうど講義のネタ切れだったじゃないですか。」

「よしいいぞ青木。
小説でへたれキャラ設定にしてごめんなさい。
青木ファンクラブの方に入ります。」

「そうだな。よし、次の講義を楽しみにしていきな。久しぶりに頑張るぞ。」

よかった、師匠の暴走を止められるのは、弟子の青木だけなんだ。
私はこのチャンスを生かして、研究室から立ち去った。

次回の講義が楽しみだ。

ちなみに小説の評価はB（普通）だった。

四章 弟子のつぶやき

「うわああああ愛って何だ何だ何だおいしいものか!?!」

女子学生が謝罪に来た後、師匠は狂ったように叫んだ。

一年に三回起こる月原教授ビックバンだ。

こうなると徹夜して、過労ギリギリになって泡を吹いても考え続ける。

今こそ僕、弟子の出番だ。

師匠を支えてこそ弟子だ。

さっきの女子が書いた小説で、僕はへたれだった。

しかし本当は師匠がへたれだとはつきりさせるときが来た。

そろそろ第一の癖を始める頃だ。

おっ、本を手に取った。

例年なら本の角を頭にぶつけ出す。

しかし僕は目を疑った。

何と、きちんと読み始めたのだ。

まさか師匠は、学生の小説の魔力で頭のねじがすっ飛んでしまった

のか。

恐るべし妄想小説。

しかし今年から癖が本を読むことに変われば、僕は安心して見守っていられる。

これでよかつたんだ。

おっと、師匠が何か言いたげな目でこちらを見ている。

「青木君、この字どう読むんだっけ？」

師匠が示したのは、師匠のフルネーム月原司の司だった。

ついに師匠は自分の名前の読み方を忘れたとでも言うのか！

いや、まさかそんなことはない。

きっと弟子の僕がきちんと師匠の名前を答えられるかテストしているだけだ。

「つかさです。」

師匠は答えを聞いても不満そうだ。

「どうしましたか？」

「いや、司ってつかさっぽくないなあと思った。」

「ぼくなくてももつかさって読むんですよ。ご自分の名前でしょう。

忘れちゃだめですよ。」

「ああ、そうか。これは俺の名前か。みんな俺のことを教授とか師匠と呼ぶから、すっかり忘れていた。」

どうやら師匠を病院に連れて言った方がよさそうだ。

「師匠、これから楽しい所に行きましょう。」

こうでも言わないと師匠は病院に行かない。

「楽しいところ？居酒屋か！よし飲むぞ飲むぞ！」

師匠が分かりやすく喜んでいるので、病院に連れていくのは後日に行しよう。

たぶん後回しにしても大丈夫だ。

第二の癖、酒をすぐ飲みたがるは例年通り発動したな。ちよっと安心だ。

居酒屋に師匠を連れていくと、落ち着いたのか黙った。店でさっきのように変なことを言いだしたり、奇声をあげられたら困る。

師匠のすきな日本酒を注文し、待つ。

師匠はやたらとそわそわし始めた。

耳を澄ますと、小さな声で

「酒、酒、酒、あるこーる、アルコール……。」

と繰り返しているのが聞こえた。

子供じゃあるまいしやめて欲しい。

恥ずかしいから早く酒来てくれ。

アルバイトの奴め、もたもたしてるんじゃないか。

師匠のアルコールアンコールで、イライラがピークに達しそうな時、

やっと酒が来た。

師匠は手を合わせて

「いただきます。」

と言ってから、腹が立つほどちびちび飲み始めた。

酒を舐めているみたいだ。

僕は師匠を見ないようにして、腹いせにくびくび酒を飲んだ。

「あつ、ちよつと君、そんな一気に飲んで……もったいなあ、

もつっ。」

もうって言いたいののはこつちで、もつっ。でも師匠に反論すると、

話が長いから口に出さない。

僕はへたれじゃなくて策士だ。

へボ師匠を追い詰めて、教授の座を手に入れようと弟子になった。

その結果、師匠が心配すぎて世話を焼くうちに、まあこれでもいい

かと思うほどの策士だ。

あれ？これじゃ策が失敗している。

じゃあ僕はへたれか。

今夜は不味い酒になりそうだ。

一時間も飲んだらどうか。

師匠は酒を舐め終わって眠りだした。

僕は頭が痛くなった。

脳内がへたれの文字で埋め尽くされた。

トイレで吐いても脳内の文字は消えない。

いつもなら、ピンチの時に師匠が何かいいことを言ってくれて、迷いが消えると言うのに。

結局僕は師匠を頼っているんだ。

二人分の料金を支払い、師匠を背負って歩く。

タクシーを使えばいいけど、残念ながら飲み代に使いすぎて持ち合わせがない。

幸い大学から居酒屋と師匠の下宿と僕の家は歩いて通えるほど近い。こんな姿を学生に見られたら、また小説を書かれる。

もう知ったことが。

師匠は日ごろの不摂生のせいで、かわいそうなくらい体重が軽い。あの事件以来、師匠は廃人のようになってしまった。

僕にとっては教授にのし上がるチャンスだったのに、師匠のぼろぼろぶりを見ていたらかわいそうになって、教授の地位なんてどうでもよくなった。

そういえば、師匠は言っていた。

地位なんて臆病ものを働かせるためのまやかしだと。

師匠のポッケから鍵を取り出し、下宿に入る。

電気をつけると、部屋が本だらけで足の踏み場がない。

本の海に島があった。ベッドだ。

でもよく見ると、積んだ本の上に布を被せているだけだ。

師匠は元々ダメ人間だったが、あの事件のせいでもっとダメになってしまった。

師匠をベッドに横たえて帰ろうとした。

しかし、ドきちようめんな僕は、乱雑に本が積まれているのが許せ

なかった。

本を著者名順にし、札数順にし、文庫本とハードカバーの本は背の高さが違うので分けて……。

何時間もかかってようやく全部整頓ができた。

整頓後は住めるスペースが随分増えた。

明日師匠が起きたらびっくりするだろうなと思いながら、達成感と疲労感に包まれて僕は眠った。

五章 師匠さびしんぼ

「教授、聞いてくださいよ。」

昼休みになるといつも同じ学生が質問に来る。

初めのうちは面倒だと思っていたが慣れれば楽しみだ。

ただ一つ気になることがある。

それは、ついうっかり「君は友達いないだろう。」と言ってしまいそうなことだ。

この学生は昔の俺にそっくりだから、きっと友達がいらない。

「教授、ぼーつとしてどうしたんですか。」

「はっ、いけない。で、何だい？」

「教授にぜひ見ていただきたい動画を紹介したいんです。」

「それはどういった内容か。」

「哲学に役立つ内容です。豚の屠殺ですから。」

「うむ、怖いのは苦手だが、哲学の肥しになるなら見なければ。早速見せてくれ。」

「いえ、それは出来ません。食堂で見るとは酷すぎます。」

「分かった。では後ほど見るとしよう。」

学生は何やら記号を書いた紙を渡してきた。

学生が去ったのち、弟子に聞いてみる。

「この暗号解けるか？」

「あ、これはURLですね。」

「ゆーあーるえる？」

「師匠はパソコンが苦手だから知らないんですね。これを検索バーに入力すると一発で見たいサイトに行けるんですよ。」

「へっ、検索バー？さいと？はて？」

「とにかく後で見てください。師匠一人では見れないでしょうから、協力しますよ。」

「頼んだよ、我が弟子よ。師匠はもう時代についていけない。」

哲学の研究室で悲劇が起こった。

動画が予想以上に生々しくて、俺は行動不能になってしまった。

哲学者だと言うのに、もう何も思考できない。

哲学の肥しにはなりそうだが、刺激が強すぎる。

脱力して椅子に全体重を預けていると、弟子がお茶を汲んできてくれた。

しかし手が振るえて受け取れなかった。

翌日も行動不能だった。

講義のある日だったので代わりに弟子が講義をした。

俺は自宅から一步も出られない。

体が動かない。

動画という光の点と音の集合の動きごときで、ここまで打ちのめされるとは思わなかった。

お腹が減っているが何も食べたくない。

カロリーメイトの封を破ることさえ億劫だ。

これではあの事件の直後と一緒だ。

何も出来ない愚かな自分への罰として、あの事件のことを振り返って見た。

昔、この大学には俺ともう一人哲学の教授がいた。

もう一人の教授は有名で人気があった。

俺はその教授の執筆した本を読んだ。

有名な割には理論の運びがめちやくちやで、「こんな文章で有名になれるのか。」と憤った。

その頃俺は若かったから、これではいけないと思い、その教授の理論を全否定する理論を書いて出版した。

そのせいで有名教授とかなり揉めた。

相手は人気者だったので、人脈のフル活用して俺を大学から追放した。

その直後、人気教授の理論の不確かさについて話題になり、人気教授も首になった。

ほとぼりが冷めたころ、俺は大学に再び雇われた。

俺はもうだめだ。

弟子よ、早く俺の元にお見舞いに来てくれ。

そして、何か喰わせてくれ。

嘘でもいいから慰めてくれ。

自分一人ではこの泥沼を抜け出せそうにない。

ゆっくりと長い時間が過ぎていく。

目を瞑ると、少しだけ力が湧いた。

だめだと思いながら眠っていたらしく、目が覚めたころには外が真っ暗だった。

動けそうだ。よし、カロリーメイトを食べよう。

むしゃむしゃ食べていると、誰か来た。

弟子よ、来てくれたのか。

全ての力を使って玄関へ行く。

するとそこに立っていたのは新聞の集金人であった。

現実はこのなにも醜く、美しい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9357n/>

哲学でいこう！

2010年10月9日19時29分発行